

海運の重要性を学校教育の場で
～東京都内にて教科書会社向けの海事施設の見学会を実施～

当協会は、日本の暮らしと産業を支える海運をはじめとする海事産業の重要性を学校教育において取り上げていただくよう、教育関係者に対し海事施設等の見学会や授業への協力、資料提供等を実施しております。

今般、3 月 12 日（水）に日本海事広報協会の主催する教科書会社向け海事施設見学会に協力しましたので、その様子をお知らせします。

当日は、東京臨海部広報展示室「TOKYO ミナトリエ」内の会議室で、当協会担当者と東京都港湾振興協会の担当者より、海運と東京港に関する講話を実施した後、中央防波堤外側コンテナふ頭 Y1・Y2 バースを見学し、最後に栗林商船協力のもと RORO 船*の船内見学を実施しました。

① 「TOKYO ミナトリエ」での講話

まずはじめに、東京臨海部広報展示室「TOKYO ミナトリエ」内の会議室にて、海運および東京港についての講話を実施しました。

当協会からは、日本の輸出入量の 99.6% は海上輸送が担っており、海運は日本にとって必要不可欠なインフラであることに触れたうえで、「世界単一市場」「市況変動が大きいこと」「国際性」等の外航海運の特徴を解説しました。その後、自動車船やコンテナ船、RORO 船といった貨物船の船種を紹介したほか、海運業界の脱炭素化への取り組み等についても説明しました。

東京都港湾振興協会の担当者からは、東京港について説明があり、東京港は外国との貿易におけるコンテナ貨物量が国内トップで、世界各地の主要港と 1 週間 88 便の定期航路で結ばれている国際港であることが紹介されました。



海運について説明する様子



TOKYO ミナトリエの展示を見学する様子

講話後は TOKYO ミナトリエの展示見学の時間が設けられました。地上 100 メートルから東京港の様子を一望するとともに、東京港ではレインボーブリッジの下を通航できないサイズの客船のために新たなターミナルが建設され、今後は、東京国際クルーズターミナルと晴海ふ頭の 2 か所で客船の受け入れを行う予定であることなどが担当者から説明されました。

② 中央防波堤外側コンテナふ頭 Y1・Y2 バースを見学

TOKYO ミナトリエから、バスで中央防波堤外側コンテナふ頭に移動した後、ターミナル内の会議室で東京港埠頭株式会社の担当者から東京港コンテナターミナル（以下 CT）の概要が説明されました。東京港 CT は拡張余地が少ないながらも、大消費地に近接する経済合理性の高さを生かすべく、ゲートオープンの時間拡大や予約システムの導入、混雑情報の発信等、様々な工夫がなされていることが説明されたほか、使いやすく、かつ災害に強い港となるよう、CT の再編整備等が進められていることが紹介されました。

説明の後は、展望室から CT 全景を見学し、参加者は窓から見える青いスライド式のガントリークレーン等の写真を撮影したり、担当者に質問をしたりしていました。

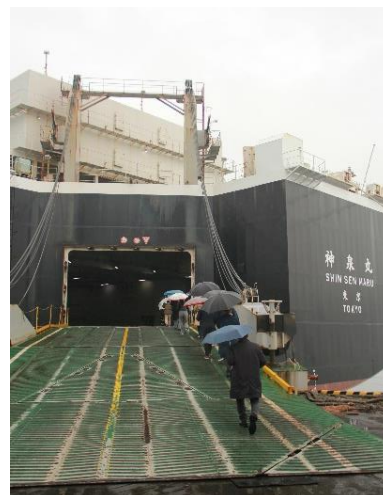


ターミナルを一望できる展望室から見学

③ RORO 船「神泉丸」の船内見学

CT 見学後は、再びバスに乗り品川ふ頭へ移動し、栗林商船の RORO 船「神泉丸」の船内を見学しました。船の後方にあるランプウェイ（船と岸壁をつなぐ傾斜路）から船内に入り、担当者の説明を受けながらブリッジ（船の操縦を行う場所）を見学し、最後に車両甲板も見学しました。

担当者からは、内航船が国内輸送で果たしている役割の重要性や、船員不足の課題についての説明を受けました。参加者からは、「改めて海運の重要性を強く認識できた」「日本が島国であり、海運が重要であることは理解していたが、今日の見学を通じてその実感を深めた」といった感想や、「子供たちに船の重要性を実感してもらうためには、実際に見学することが非常に効果的だと感じた。是非子供たちに見学してほしい」という意見も聞かれました。



いざ RORO 船の船内へ



トラックや自動車が自走して乗り込む姿は迫力がある



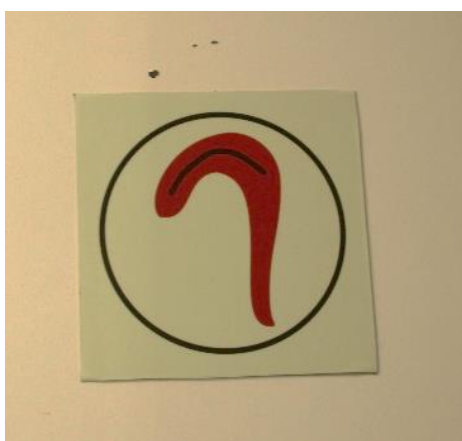
ブリッジ見学の様子



車両甲板を走る自動車



トラック等が走ることのできる船内のスロープ



船内でよく見かけるこのマーク、
実は煙感知器による保護区域を表している



ランプウェイから船内に入ったところで、担当者の解説を聞く参加者

当協会は引き続き、会員会社や海事関連企業などと連携しながら、海事産業をより教育の場に取り上げてもらえるよう広報活動に注力してまいります。

***RORO 船**：貨物を積んだトラックやトレーラーが自走して乗り込み、運搬できるロールオン/ロールオフ方式の貨物船。

以上